

臨床研究のお知らせ

研究名称

「高齢者救急集中治療に対してフレイルが及ぼす影響についての多施設共同研究」

1.研究の対象

2019年11月1日から2020年1月31日の間に研究参加施設の救急室に救急搬送もしくは自力受診した患者。

2.研究目的・方法

我が国の高齢化率は2017年に27%を超え、今後も上昇を続けます。この傾向は他の先進諸国においても同様ですが、日本の高齢化率は世界でも抜きん出ています。このような高齢化社会の中で欧米諸国においては1980年代から高齢者に対する集中治療の意義について議論が行われていますが、我が国においては超高齢者の救急集中治療の予後やQOLを示す報告もあまり行われておらず高齢者集中治療の意義を検討し、予後予測を行うための指標や予測因子が必要と考えられます。高齢者の集中治療の予後を予測する因子に関する研究については、いくつか報告されていますが、有用な予後予測因子が定められていないという現状です。そのような状況の中で、高齢者の脆弱性の指標としてフレイルの重要性が提唱されていますが、QOL、ADLや予後との関係性は十分に検証されているとは言えません。本研究では国内の救命救急センターもしくは集中治療専門医研修施設の多施設で、救急室からICUに直接入室した65歳以上の患者を対象として前向き観察研究を行います。フレイルの指標として、救急搬送約2週間前の臨床フレイル・スケール(CFS)を聞き取り調査し、CFSと予後、QOL、ADL低下の関係性を検討します。

本研究の目的は我が国の高齢者の救急集中治療後の予後とQOLを明らかにし、また予後・QOL、ADLに対するフレイルの影響を検証することです。

高齢者の救急集中治療後の予後とQOL、ADLを調査した研究は世界的にも例がなく、貴重な研究となります。また、臨床現場での判断指標としてのフレイルの重要性を実証することで臨床判断の拠り所としての貢献が期待できます。今回の研究成果は、超高齢化社会を牽引する我が国でしか出せないデータとなり、意義深いものと考えています。

研究期間: 倫理委員会承認後～ 2020年12月31日

3.研究に用いる試料・情報の種類

情報: フレイル・スケール、入院日数、生存率、ADL や QOL、退院先、院総医療費、等

4.個人情報に取り扱い

個人のプライバシーに関する情報は守られ、個人が特定されることはありません。

5.研究組織

研究機関: 国立病院機構横浜医療センター救急科

研究責任者: 大塚剛・望月聡之

6.お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先:

当施設研究責任者: 国立病院機構横浜医療センター救急科 大塚剛・望月聡之

連絡先: 045-851-2621 (代表)

* 平日、9時～17時に御連絡下さい。